

2017年2月5日(日)

説教:「来るべき方はあなたでしょうか」

聖書:マタイによる福音書11章2～19節

長崎・外海町の海を見下ろす場所に「沈黙の碑」が立っている。遠藤周作の小説『沈黙』の一節を記した碑である。「人間が／こんなに哀しいのに／主よ、海があまりにも／碧いのです」。その時代にキリストを信じたがゆえに、拷問を受け、迫害された宣教師やキリストンの人々の祈りに聞こえる。私たちはこの祈りをどう受けとめたらよいのだろうか。

小説『沈黙』の終わりに一人の宣教師が、踏み絵を踏まされる記述がある。「夜明けにロドリゴは、奉行所の中庭で踏み絵を踏むことになった。すり減った銅版に刻まれたイエス様のお顔に近づいた時、涙がこみ上げ、同時に足が激しい痛みを襲われた。震えと痛みの中、足を上げた時、銅版の顔のお方が、ロドリゴに向かって言ったのである。『踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい、私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かたため十字架を背負ったのだ。』踏み絵に足をかけた時、朝が訪れ、そして鶏が遠くで鳴いた。」

バプテスマのヨハネは捕らえられ、牢の中に居た。このバプテスマのヨハネとは、イエスをキリストとして、最も理解する先駆者的役割を担っている人。ヨハネは、キリスト理解を「この世を裁く方」としてと説いた。悪を火で焼き払う裁きの到来として。しかし、未だそのような裁きは起こらない。そこでヨハネは弟子をやり「来るべき方は、あなたでしょうか・・・」と問う。それは、イエスに向き合うからこそ、その言葉が生まれて来るのだと思う。熱心に信仰を貫いているからこそ、神が「沈黙」しているように思えてしまうのかと思う。

私たちにもそのような経験はないか。しかし、主なる神は、私たちと共に居られ、私たちへの言葉を残しておられる。その主の言葉を、常に見出しながら、御言葉に触れて行きたい。

最後に、今週2・11を迎える。この日本は益々、天皇を中心とした国家、天皇を元首とした憲法づくりに励んでいる。その時、私たちの信教の自由は守られるか？再び、踏み絵を迫られる時代は来ないか？今の時代、「来るべきお方は・・・」来ておられるのかという不安は、時に私たちを襲う。しかし、私たちに語っておられるイエスの言葉を覚え、今の時代と共にあるイエスを覚えながら、必要とあらば、踊り、歌う教会として応えて行きたい。

(神谷)